

日本研究における画像の重要性

モリーン・ドノバン（オハイオ州立大学図書館専門司書）

図書館での私の仕事は主に二つある。一つは日本関係の資料を選ぶこと、もう一つは図書館利用者が日本の情報を入手するのを支援することである。そしてこの両方において、画像資料に対してより多くの注意を向けることが必要になってきている。

オハイオ州立大学図書館では、最近、画像資料の収集量の割合がますます増加している。画像資料の統計を見てみよう。

オハイオ州立大学図書館所蔵日本関係画像資料

日本語の書籍：115,000冊。そのうち画像資料は約20%

画像資料の内訳

マンガ 15,000冊

社史（会社） 4,000冊

美術 3,000冊

写真 1,000冊

地図 1,000枚・冊

映画 500本

他の日本関係画像資料 1,000冊

日本語コレクションのうち画像資料の占める割合は全体の約20%を占めている。図書館利用者からの需要が高いため、画像資料は近いうちにコレクション全体の三分の一に達することになると推測している。わずか数年前までは、図書館利用者の学術研究のため、資料はテキスト中心で絵は少ないものを主に収集してきた。しかし

今日の学術研究では、多様な角度から検討できる興味深い画像資料が図書館利用者間で非常に好まれており、画像資料をより多く収集して欲しいという要望が高まっている。

さてそこで今日は、時間は限られているが、画像資料の重要性および日本研究のための画像資料と情報リテラシー、の二つのテーマについて考えて見る。

概要を示せば、以下のとおりである。

1) 画像資料の重要性

重要＝大切なこと 例：重要文化財

重要＝肝心カナメなこと 例：マンガ

2) 画像資料と情報リテラシー

視覚情報の分析

情報過多の処理

先ず「重要性」と言う単語があるが、これは今回のシンポジウムの文脈で幾つかの意味を持つ。

一つは、大切なことと言う意味である。例えば重要文化財は、文部科学大臣が文化史的意義の深いものとして指定したものである。文化史的・学術的に特に重要な遺跡や美術工芸品などを選んで、保存して、将来の世代に伝える事である。これは重要性の一例である。勿論、重要文化財の写真や絵は、日本研究のために貴重な資料である。

しかし同時に、重要性と言う単語は肝心カナメ、つまり、不可欠なものという意味も持つ。言葉だけでは誤解を招きそうな場合でも、写真やイメージによって誤解を避けることができる。解説をするときには、実例を示すとき、効果が絶大である。

ここで一つ質問をしてみよう。画像資料がなくても、漫画を研究することは可能であろうか。多くの方は、そんなことは無理だと言うだろう。しかし、イメージのない漫画に関する資料が実際にある。多分、著作権侵害を意識的に避けた結果であろう。

例を日外アソシエーツの『漫画家人名事典』で見てもよい。この図書は、第一版、第二版合わせて OCLC Worldcat で 50 以上の北米の図書館で所蔵している。とても信頼できる情報源である。しかし、この『事典』には大部分、イメージがない。たとえば

『ヒカルの碁』と

『DEATH NOTE』の作者、小畑健に関する記述は右上のとおりである。

しかし小畑健のような人気漫画家のスタイルに関する情報は、次のように、書店かどこか別のところで探すことができる。

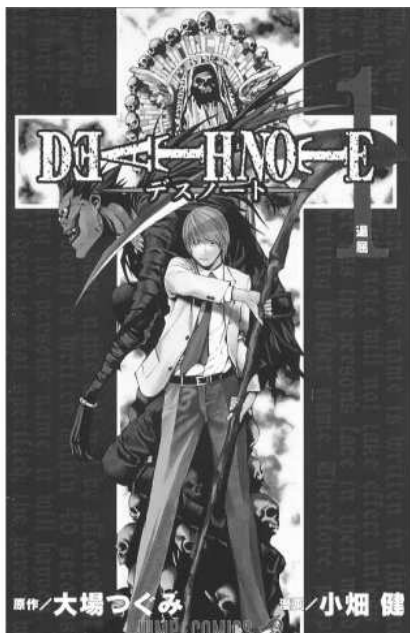
それとは逆なのが前世代の漫画である。例えば、上田トシコは最近（2008年3月）亡くなったが、彼女の作品は絶版のため日本語版でもなかなか見つからない。

『漫画家人名事典』
(日外アソシエーツ、2003)

内容見本

小畑 健 おぼたたくし

漫画家 1969年2月11日生 AB型 出 新潟県新潟市 旧ペンネーム=土方茂 学 新潟東高校卒 デビュー1986年 歴 高校までは家で一切漫画を読まなかったが、ペンを使って漫画を描き始めると夢中になる。高校では漫画同好会に所属し1986年、高校2年の時に『週刊少年ジャンプ』へ「サイボーグじいちゃん」を投稿、佳作入選(当時のペンネームは「土方茂」)。デビュー後上京、次原隆二、にわのまことらのアシスタントを務める。1998年から「ヒカルの碁」を連載、囲碁を知らない読者を引き込み大ヒットし、2001年にはアニメ化される。他の作品に「アラビアン魔神冒険譚ランプランプ」「カ人伝説」「人形草紙あやつり左近」などがある。賞 手塚賞(第30回, 準入選) [1985年] 「500光年の神話」, 小学館漫画賞(第45回, 少年部門) [2000年] 「ヒカルの碁」



原作 大場つぐみ、作画 小畑健『DEATH NOTE』（デスノート）（集英社、2004）

W 上田トシコ - Wikipedia

6月14日にテキストが更新され、ライセンスがGFDL 1.3に追加でCC-BY-SA 3.0 Unportedが併用開始になりました。この更新に詳しい情報はWikipedia:ライセンス更新をご覧ください。

上田トシコ

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

上田トシコ（うへだ としこ、1917年8月14日 - 2008年3月7日）は、日本の漫画家。少女誌執筆の頃は「上田としこ」、新聞の執筆の頃は「上田とし子」、その後「上田トシコ」と現在まで8回ペンネームを変えている。代表作『イチヂンさん』は第5回小学館児童漫画賞を受賞し、アニメ化もされるなど、日本の漫画史に残る名作と謳われている。

経歴 [編集]

- 1917年 - 東京都生まれ、生後40日で漢州ハルビンへ遷る。
- 1929年 - 小学校卒業と同時に日本へ戻る。同じ頃、松本かつぢの「ボクちゃん」を見て、漫画家志望になる。
- 1935年 - 松本かつぢに師事する。
- 1942年 - 漢州のハルビンに降り、漢州鉄道局に勤める。ハルビン日日新聞に転職して終戦を迎える。1年間の抑留の間に、漫画が荒廃した人々の心を癒すことを実感。
- 1946年 - 10月、日本へ戻る。
- 1951年 - 9月『少女ブツ』を創刊。朝刊より『ぼくちゃん』連載開始。（→58年12月）この時期『少女の友』『まわり』『少女』『女学生の友』などに、多くの作品を発表。まさに「描きまくった」と表現されるほど描いた。
- 1955年 - 9月『りぼん』創刊。朝刊より『りぼんこっちゃん』連載開始。（→61年12月）
- 1957年 - 『少女ブツ』で『イチヂンさん』連載開始（1月→62年3月）、同作はまんが史に残る名作となる。
- 1958年 - 『りぼん』で『お初ちゃん』連載開始（2月→69年4月）、11年間に及ぶ長期連載人気作品となる。
- 1960年 - 『イチヂンさん』が第5回小学館児童漫画賞を受賞。
- 1973年 - 『明日の友』に『あこバチャマン』連載開始。平成14年まで連載は続いた。
- 1989年 - 『あこバチャマン』が日本漫画家協会賞優秀賞を受賞。
- 1999年 - 著作権法100年記念として特別功労者文化賞を受賞。
- 2003年 - 日本漫画家協会文部科学大臣賞を受賞。
- 2008年 - 3月7日、心臓麻痺により東京都の自宅にて死去。享年90。

この項目「上田トシコ」は、漫画家・漫画原作者に関する書きかけ項目です。加筆、訂正などをして下さる協力者を求めています。

上：Wikipediaの上田トシコのページ（2009年7月23日アクセス）

右：『日本漫画家名鑑'62』（芸術学院出版部、1962）p80

上田とし子

大正6年生れ
17才ごろから絵を志し松本かつぢ氏に師事、その後クローキーン研究所、コンコッドメイリ氏などに学ぶ。第五回小学館児童漫画賞受賞「ボクちゃん」「イチヂンさん」
女流漫画家協会
日本児童漫画協会



どこで見つけられるだろうか？ Wikipedia だろうか？ ところが Wikipedia でも同じである。多分、著作権侵害を意識的に避けた結果、そこでもイメージは使っていない。それでもこのような人気漫画家の作品は、



東京都文京区湯島三組町90番地
電話 (831) 6381番

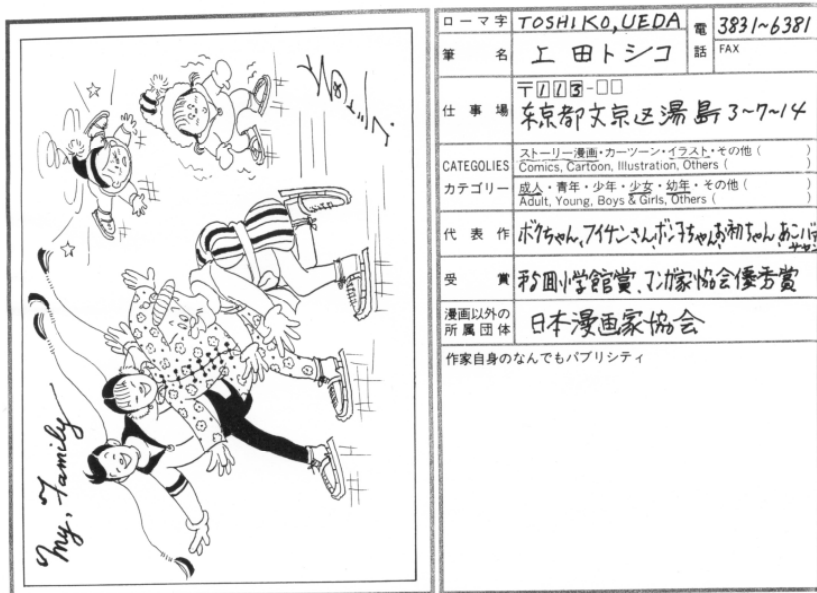


『日本漫画家名鑑 500: 1945-1992』（アクア・プランニング、1992）
p150-151

日本語版も英語版も書店で簡単に見つかるからまだ良い。

繰り返しになるが、『漫画家人名事典』と Wikipedia とには、伝記的情報はあるがイメージはない。しかし 1962 年に出版された『日本漫画家名鑑』には漫画家の伝記情報と一緒にマンガの見本が掲載されており、当時はそれが一般的だった。90 年代までは『漫画家名鑑』やカタログにマンガの見本をのせる事は常識だった。1992 年に、漫画に関する参考図書が二つ出版された。『日本漫画家名鑑 500』と『日本の漫画家カタログ』である。この両方にマンガの見本が掲載されている。『日本漫画家名鑑 500』には、漫画家の自画像とマンガの見本、簡単な自伝などが掲載されている。『カタログ』のほうには、漫画家からのアンケートの回答と漫画の見本

が掲載されている。これらは漫画研究のためにとっても役に立つものである。



『日本の漫画家カタログ』（日本漫画家協会、1992）

もう一つ例を見てみよう。私は授業で漫画を扱う時に、マンガの読み方、描き方についての分析方法も教えている。漫画家に関する参考図書と同じ様に、古い書籍は具体的イメージを示して漫画を描く方法を説明している。これは、非常に有益な資料である。

オハイオ州立大学でマンガ研究のための専門的コレクションを構築する際に、『日本漫画家名鑑 '62』『日本漫画家名鑑 500』『日本の漫画家カタログ』『マンガのかき方』等の参考図書を収集した。しかしほかの図書館では、このような画像が豊富な古い書籍はあまり収集できていない。現在の著作権法の下では、この様にイメージが多数ある漫画参考図書を複製したり出版することが難しいと

認識している。しかし参考図書はさておき、漫画に関する論文や学術書において、イメージがあることの重要性は軽視できない。

画像利用の重要性についてこれだけのことを述べて、次のテーマに移る。画像資料と情報リテラシーについてである。

今日、私たちのまわりには視覚情報があふれている。従って視覚情報の幅広い知識と理解力を身に付ける必要がある。この点に関して、最近刊行のアジア学会誌 *Journal of Asian Studies* (Vol.67, No.2, May 2008)で、Julia Adeney Thomas 教授の論文に良い例がある。教授はこの論文 “Power Made Visible: Photography and Postwar Japan’s Elusive Reality” (p364-395) で、占領期の写真の内容とその写真に関する議論を徹底的に分析している。この論文は視覚情報を歴史資料として使い、数多くの貴重な洞察と考えを提供した。Thomas 教授はこの研究で、占領期のことを完全に理解するには視覚情報の分析が必須であることを証明したと思う。同じようにほかの分野でも、即ち漫画、地図、映画、社史、広告、美術品などの研究のためにも、視覚情報分析は広がっている。

最後に、情報氾濫について少し話したい。

最近、シアトルで “No Time To Think” 会議のウェブサイトが立ち上がった。デジタル通信技術が発展したおかげで大量の情報が簡単に得られるようになったが、一方、それによって新たな課題が生まれている。“No Time To Think” 会議はこの課題への取組みの一例である。

情報氾濫の近未来には、多すぎる情報の処理に必要な能力も求められると思う。私たちは情報の詰め過ぎの世界を静かに見守る態度を養う方がいいかも知れない。情報の詰め過ぎを静かに見守る態度を養うことに関して、日本の視覚情報文化には優れた実例がたくさんある。外国人ライブラリアンとして私は、日本中どこにおいても、複雑な情報を簡略化したものに気づく。古代においては、大量の仏教情報は曼荼羅や龍安寺の石庭に単純化された。伏見稻荷大社を歩くと面白い情報に巡り合う。古代から現代まで、日本の情報デ

デザインは世界中で称賛されている。これからは、日本の視覚情報文化から、情報整理術を学ぶことがたくさんあると思っている。

結論として、日本の視覚情報文化は非常に豊かな資料から成り立っている。それゆえ日本文化を理解するために、画像資料を分析するトレンドが一層、広まっていくと考えられる。今日のこの会議の目的は、この豊かな資料を使っての先駆的な研究活動を促進し、振興することだと言っても過言ではない。今日は、さまざまな画像資料に関する問題について、率直な意見交換の機会を得ることができると期待している。